

薬局・薬剤師ビジョン 2040

DX で安全・安心を支え、専門性で心に寄り添う

進化する薬局インフラの姿

 一般社団法人
日本保険薬局協会

薬局・薬剤師ビジョン 2040

—DX で安全・安心を支え、専門性で心に寄り添う 進化する薬局インフラの姿 —

2040 年に向けた宣言

日本の医療は、人口構造の急激な変化、医療需要の増大、そして医療を支える人材・資源の制約という、これまでにない構造的転換点を迎えている。

こうした時代において、**医薬品が確実に供給されること、薬物療法の安全性が守られること、不安なときに専門職が寄り添い、適切な意思決定へ導くこと**は、国民の生命と生活を支える前提条件であり、決して止めてはならない社会インフラである。

日本保険薬局協会は、設立以来一貫して「**保険薬局を社会インフラとして確立し、国民利益に貢献する産業へ進化させる**」という使命のもと活動してきた。私たちは、国民の利益を最優先に掲げ、他職種、行政、関係団体と連携し、現場の実態と専門的知見に基づく政策提言を行う「**行動する機関**」として歩み続ける。

本ビジョンは、日本保険薬局協会が会員に向けて示す行動指針であると同時に、業界、行政、そして国民に対し、2040 年に向けて果たす覚悟を示す宣言である。

2026 年 4 月 9 日 策定

日本保険薬局協会

目次

序章 2040 年に向けた宣言	1
第 1 章 2040 年に向けた社会・医療環境の前提	2
1. 制度的変遷と薬局・薬剤師の現在地	
2. 人口構造の変化と医療需要の変容	
3. 医療 DX の推進がもたらす転換点	
第 2 章 薬局・薬剤師の現状と課題	3
1. 【基盤】医薬品供給・業務基盤の現状と課題	
2. 【機能】薬局・薬剤師が提供してきた機能と課題	
3. 【役割】地域医療における役割の現状と課題	
第 3 章 2040 年に向けたあるべき姿	4
第 1 節 基盤の強化	4
1-1 社会インフラとしての強靱な基盤の確立	
第 2 節 機能の高度化	5
2-1 専門性を最大限に発揮する薬学的機能への転換	
2-2 立地に依存しない質の高い機能の提供と成果（アウトカム）の創出	
第 3 節 役割の深化と分化	6
3-1 地域医療・介護をつなぐハブとしての役割	
3-2 未病・予防への貢献	
3-3 機能分化と連携による持続可能性	
終章 2040 年への決意	7

薬局・薬剤師ビジョン 2040

—DXで安全・安心を支え、専門性で心に寄り添う 進化する薬局インフラの姿—

序章 2040年に向けた宣言

2040年、日本のどこに住んでいても、必要な医薬品が確実に届き、データとデジタル技術によって薬物療法の安全性が担保される。そして不安を感じたときには、必ず「人」である薬剤師が寄り添い、患者が安心して適切な判断を行えるよう支えてくれる。

「DX」と「人」が融合した、世界で最も信頼できる医療インフラ。それが、私たち日本保険薬局協会が目指す2040年の医療の姿である。

日本の薬局・薬剤師は、医薬分業の進展とともに、処方箋調剤を中心とした安全で確実な医薬品供給を担い、長年にわたり日本の医療を下支えしてきた。疑義照会、監査、服薬指導、医薬品管理といった日々の実践は、決して目立つものではない。しかし、その積み重ねこそが、薬物療法の安全性を守り、地域医療を止めない社会インフラとして機能してきた事実は揺るがない。近年顕在化した医薬品供給不安は、「医薬品が安定して届くこと」そのものが、国民の生命と生活を支える前提条件であることを改めて浮き彫りにした。2040年に向けて、この前提はさらに重みを増す。

日本保険薬局協会の活動の核心は、設立時より一貫して「**保険薬局を社会インフラとして確立し、国民利益に貢献する産業へ進化させる**」という強い意志にある。私たちは、常に国民の視点に立ち、その利益に資することを第一義として、他職種、行政、関係団体と積極的に連携し、現場の実態と専門的知見に基づく政策提言を行う「行動する機関」として、これからも歩み続ける。

本ビジョンは、会員に向けた行動指針であると同時に、業界、行政、そして国民に対し、2040年に向けて果たす覚悟を示す宣言である。

第1章 2040年に向けた社会・医療環境の前提

1. 制度的変遷と薬局・薬剤師の現在地

2015年の「患者のための薬局ビジョン」策定以降、**かかりつけ機能や対人業務へのシフトは着実に進展し、地域の中で新たな価値を創出してきた**。しかし、自らを省みれば、現在の変革スピードは、将来推計される医療需給の逼迫に対し、充分とは言い難い。

一方で現在は、従来の調剤・医薬品供給という中核的役割と、新たな対人・地域機能が併存する状況にある。医薬品供給は社会インフラとしての根幹であり、その継続性と信頼性は、今後さらに重要性を増す。これからの薬剤師は、「強靱な医薬品供給インフラ」を維持しつつ、その上で「対人業務」を充実させるといふ、二つの重責を同時に果たす必要がある。

2. 人口構造の変化と医療需要の変容

2040年には、85歳以上人口が1,000万人を突破し、要介護高齢者数は約988万人（2020年比約36%増）に達すると推計されている。しかし、医療・介護需要の動向は全国一律ではない。都市部を中心に需要が爆発的に増加する地域がある一方で、人口減少が先行し需要が縮小に転じる地域もあり、その「地域格差」は極めて大きい。加えて、85歳以上人口の急増により、認知症、在宅医療対応の増加など、医療ニーズは質的にも大きく変化する。

一方で、生産年齢人口は2025年比で約1,000万人減少し、医療・介護分野の人材不足は不可逆的に進行する。**医療需要は増え続けるが、支える人と資源は減少するという構造的課題が全国で顕在化する**。

3. 医療DXの推進がもたらす転換点

医療DXの推進は、この構造的課題に対する有力な解決手段であると同時に、**薬剤師に業務の質的転換を迫る起点となる**。マイナ保険証や電子処方箋の普及により、物理的な「対面・立地」に依存せずとも、薬剤情報の一元的・継続的管理が可能な基盤が整いつつある。今後は、過去の延長線上の改善ではなく、医療DXを前提とした飛躍的な進化が求められている。

DXの目的は、単なる効率化ではない。データを活用して重複投薬や副作用を未然に防ぐ安全性を高め、限られた人的資源で最大の成果を生む生産性を追求すること、そしてそれによって**創出された時間と情報を、薬剤師が本来の専門性を発揮することへと集中させることにある**。

第2章 薬局・薬剤師の現状と課題 — 基盤・機能・役割の現在地 —

1. 【基盤】医薬品供給・業務基盤の現状と課題

わが国の薬局・薬剤師は、医薬分業の進展とともに、処方箋に基づく調剤を中心とした医薬品供給体制を構築し、薬物療法の安全性と継続性を支えてきた。疑義照会、処方監査、服薬指導、医薬品管理といった日常業務は、治療効果の最大化や副作用リスクの低減に寄与し、日本の医療安全の基盤を形成してきた。また、薬局は都市部・地方部、門前・面対応、単独店舗・チェーンなど、多様な形態で地域医療を支えてきた。この多様性こそが、地域ごとの医療提供体制を柔軟に下支えしてきた強みである。

一方で、近年の医薬品供給不安や制度対応・対人業務の複雑化による業務量の増大は、現場の大きな負荷となっている。

- ・ 医薬品供給の安定性が、個々の現場努力に依存している。
- ・ 業務が個人の経験や能力に依存しており、標準化・効率化が進んでいない。
- ・ 医療 DX 対策の進展度合いや投資余力に、薬局間で大きな差がある。

これらは、2040年に向けた医療需要の増大と人材不足の中で、**現行の基盤のままでは持続的な運営が困難である**ことを示している。

2. 【機能】薬局・薬剤師が提供してきた機能と課題

薬局・薬剤師はこれまで、調剤業務を基盤としつつ、かかりつけ機能、在宅医療、多職種連携、一般用医薬品の提供、健康相談など、その機能を多角的に拡張してきた。特に、患者の生活背景まで踏み込んで薬学的管理を行うことは、医療の質向上に不可欠な要素である。現在、多くの薬局がこれらの機能を幅広く担おうと努めているが、今後はさらに一歩進み、地域特性や自局の強みに合わせた「機能の最適化」が求められる段階に来ている。「すべての機能を等しく担う」というこれまでのアプローチから、各薬局が得意とする分野や地域特性に合わせた機能を特化させることで、より質の高いサービス提供体制が構築できるはずである。現状から脱却し、**強みを活かした機能を発揮することが**、次なる成長への鍵となる。

3. 【役割】地域医療における役割の現状と課題

私たち薬局は、住民にとって最も身近な医療拠点であるからこそ、病気になる手前の段階で地域住民に寄り添い、必要に応じて適切な医療・介護へとつなぐ役割が、社会から強く期待されている。これまでも薬局の献身的な取り組みにより、地域医療の質の向上に貢献してきたという自負はある。しかし現状では、その役割が十分に発揮されているとは言い難い。多くの薬局においては、依然として「処方箋応需」が主軸であり、セルフメディケーション支援や多職種連携の要としての機能は限定的である。問題の本質は、**社会のニーズが医薬品の供給を超えた役割にシフトしている中で、我々の姿勢を大きく変革しきれていない点**にある。

第3章 2040年に向けたあるべき姿 — 基盤・機能・役割の再定義 —

第1節：基盤の強化

1-1 社会インフラとしての強靱な基盤の確立

2040年に向けて、医薬品供給は、いかなる状況においても途絶えてはならない社会インフラとしての重要性を増している。そのため、薬局・薬剤師には、基盤そのものの“効率性”と“強靱性”の両面を高める取り組みが求められる。

まず、

- ・ 調剤、監査、在庫管理といった定型業務における医療DXの推進とAI・ロボティクスの活用
- ・ 医薬品供給を支える情報基盤の高度化

を通じて、業務プロセスの抜本的な効率化と高度化を図る。

さらに、

- ・ 災害、供給不安、サイバーリスクに耐え得る事業継続性の確保
- を進めることで、あらゆる環境下でも医薬品供給を止めないレジリエンスを備えた体制を構築する。

これらの取り組みを組み合わせることで、労働人口が減少する環境下でも高い生産性と安定性を維持できる「持続可能な基盤」が確立される。特に人口減少が先行する過疎地においては、配送ネットワークの整備やオンライン服薬指導の普及を推進し、地理的条件によらず医薬品供給と質の高い医療を確保していく。

あわせて、

- ・ 企業としてのコンプライアンス
- ・ 医療情報の価値と公共性への深い理解
- ・ データ連携・活用における透明性と信頼性

を前提としたセキュリティを担保し、社会から信頼される医療インフラであり続ける。しかし、これらの変革を現場の実践のみで完遂することは困難である。医薬品供給と薬学的専門性を社会インフラとして持続させるためには、既存の制度や規制の枠組みが、現場の実態や技術進展に即したものとなっているかを継続的に点検することが不可欠である。日本保険薬局協会は、現場の実態を知る組織としての強みを活かし、**国民利益を最優先に、制度の在り方について建設的な提言を行っていく。**

第 2 節：機能の高度化

2-1 専門性を最大限に発揮する薬学的機能への転換

2040 年に向けて、薬剤師は対物業務の効率化を進め、その上で対人業務において高度な臨床判断や複雑化する薬物療法への対応、患者の生活背景や価値観を踏まえた継続的ケアに注力する必要がある。こうした役割こそ、AI には代替できない、人だからこそ発揮できる専門性である。

この質的転換を実現するためには、医療 DX の推進、AI の適切な活用、そして AI と人との役割分担による高度な薬物療法支援が不可欠である。加えて、多職種との連携・協働を通じた業務全体の最適化によって、薬剤師が本来の専門性に集中できる環境を整えることが重要となる。

これらの取り組みの目的は、単なる省力化ではない。**創出された時間と集約された情報を薬剤師の専門性発揮に振り向け、重複投薬や副作用の未然防止など、医療の質と安全性を一層向上させること**にこそ、その本質がある。

2-2 立地に依存しない質の高い機能の提供と成果（アウトカム）の創出

医療 DX の進展により、マイナ保険証や電子処方箋管理サービス等を通じて、患者の薬剤服用状況をリアルタイムかつ一元的に把握することが可能となった。これにより、「かかりつけ」のあり方は、患者の利便性を尊重した上で、物理的に特定の場所に患者を繋ぎ止める形態から、デジタル基盤を通じた「継続的な情報管理と質的な介入」へと本質的な変容を遂げている。

これからの薬局・薬剤師には、共有された客観的データと対話による主観的情報を組み合わせ、患者がどこにいても最適な薬学的管理を提供することが求められる。こうしたパラダイムシフトに合わせ、評価体系も、従来の立地や集中率といった外形的な基準に固執するのではなく、提供された機能の質や成果を正当に評価する体系へと移行すべきである。私たちは、**アクセスや利便性という患者の主体的な選択を尊重しつつ、立地条件に左右されず、高い機能を発揮する薬局が、健全に持続・成長できる制度設計の実現を強く推進していく。**

第3節：役割の深化と分化

3-1 地域医療・介護をつなぐハブとしての役割

薬局は、単なる医薬品の受け渡し場所ではなく、医療と生活、医療と介護をつなぐ「地域連携のハブ」としての役割を担う。高齢化が進む中、患者の情報を一元的に把握し、医師、訪問看護師、ケアマネジャー等との密な情報共有、多職種連携による包括的なケアの提供、在宅医療における薬学的管理の主導を通じて、地域全体としての医療提供の質と効率を高める。薬局がハブとなることで、患者は**地域の中で切れ目のない医療・介護を受けることが可能**となる。

3-2 未病・予防への貢献

治療が必要な患者への対応だけでなく、**健康な生活者に対する「未病・予防」への貢献**も重要な役割である。地域住民にとって最も身近でアクセスしやすい医療拠点として、体調の変化や不調を感じた初期段階からの相談対応、セルフメディケーションの適切な支援、受診勧奨の要否判断を行い、重症化予防や健康寿命の延伸に寄与する。**処方箋がなくても気軽に立ち寄れ、健康に関する意思決定を支える「ファーストアクセス」の場としての機能を確立する。**

3-3 機能分化と連携による持続可能性

前述した「高度な専門性」「ハブ機能」「未病・予防」のすべてを、一つの薬局が単独で完璧に遂行することは現実的ではない。したがって、2040年に向けては、特定の専門領域に特化した薬局、地域密着で在宅に強く、ハブ機能を発揮できる薬局、未病・予防や健康サポートに注力する薬局といった「機能分化」を進めることが不可欠である。役割の違いは優劣ではなく、地域ニーズに応じた分担である。**各薬局が強みを活かし、相互に連携・補完し合う体制を構築することで、持続可能な地域医療インフラを実現する。**

終章 2040年への決意 — 社会インフラとしての覚悟 —

2040年に向けて、私たち日本保険薬局協会は、医薬品供給という基盤を守り抜きながら、専門職として進化し続けることを選ぶ。多様な薬局が、それぞれの地域で役割を果たしながら、同じ方向を向いて社会を支える。

その先に私たちが目指すのは、2040年における二つの社会の実現である。

1. 全国どこでも等しく、安全・安心な医療が受けられる社会
2. 患者自身が選択し、納得して医療を受けられる社会

AI・ロボティクスという先端技術と、人ならではの専門性を融合させ、誰もが安心して医療を受けられるこの社会を守り抜くこと。進化するテクノロジーを積極的に取り入れ、人を大切に、国民の信頼に応え続けること。

「薬局があってよかった。薬剤師がいてよかった。」その言葉が、2040年の日本で自然に語られるよう、私たち組織の総力を挙げ、社会インフラとしての責任を引き受け、行動し、進化し続けることをここに誓う。

2040年に向けたあるべき姿



以上
2026年4月9日策定



一般社団法人

日本保険薬局協会